

フエ文化と中部ベトナム文化形成過程における 広南阮氏の首府

ファン・タイン・ハイ
(西村昌也 訳)

The Nguyễn Lords' capitals in the Huế Culture and Formation of the Central Vietnamese Culture

PHAN Thanh Hải
(Translation by NISHIMURA Masanari)

広南阮氏（阮主）の阮潢が順化に入府（1558年）して以降、順化地区は独立王国的に発展したが、特にトゥアティエンフエ（承天順化）域に、政治的中心を置いてからは中南部ベトナム全体の中心として発展し、首府も金龍（1636-1687年）以降、都市的な存在となった。そして各首府、都城や港市を中心としてキン族の文化は、在来のチャム文化や中国、東南アジア各地の影響を受け、さらには西洋などからの技術導入も行い、ダンジョン（中南部ベトナム）文化ともよべる独特の文化伝統を作り上げた。タンロン（現ハノイ）を中心とする北部ベトナムとは異なる特色ある存在となったのである。

キーワード：広南阮氏（阮主）、順化、首府（都城）、チャム、ダンジョン文化

16世紀から17世紀という時期は、ベトナム史の経済、政治、文化などいろいろな側面において特別な意味を持っている。後黎朝の封建王朝制度の衰退と恐慌は、様々な統治階級の勢力間の激しい争いを引き起こし、国土を長期間分裂に導いた。並行して、移民、商業交流、キリスト教布教といった地域間や外国との交流は、当時のベトナムの変化に大きく貢献している。象徴的な現象は、市場経済の発展や北部から南部に至る経済圏の成立が、沿海部に港市を形成させたことが挙げられる。同時に経済や伝統的社会秩序の変化は正統な統治思想であった儒教道徳が拠り所を失い、大きく動揺することになった。

阮潢（1525-1613）が順化（Thuận Hoá）の鎮守に入ってから幾世代かを経る間に、政治経済的動機の促進や存在要求の高まりにより国土の拡大を狙ったキン族の南進は、前世紀と比べて急速な勢いで行われるようになった。そうした歴史を背景に、中南部ベトナム（ダンジョン）は、独立王国のようになっ

て発展し、北部とは違う新しく多様な文化的特色をもつに至った。

後黎朝と鄭氏政権の北部ベトナムとの衝突は広南阮氏の中部を急速に発展させ、その発達の中枢は、各首府にみられることになった。広南阮氏の首府の発展過程は2時期に分けられる。第1時期は、廣治（現 Quảng Trị 省）の領域に位置した時代で、より南の領域（順廣）の中枢として機能した。第2時期は、承天順化（Thừa Thiên Huế）の地域に位置し、中南部全体の中枢として機能した時代である。

1. 中南部（ダンチョン）ベトナムの出現と各首府

阮潢（1525-1613年）は、一代で順廣地区に基盤をおいた廣南阮氏の第1代統治者である。中南部ベトナムの基礎をつくった人物であり、廣治の Thạch Hãn 川岸に首府（愛子社）を最初におき、後の富春からフェに到る中心を形成する前提を準備したといえる。

1558年時点で、阮潢は後黎期（黎中後期）の一部将であり、順化の鎮守として南に入った。実際のところ、阮潢の南進は後黎朝の中興に功績のあった阮氏と鄭氏との権力闘争の場であった朝廷からの逃亡であった。阮潢は、阮氏族を継承するものとして、一族が身を隠し、立業できる新天地を探す必要があった。

この新天地で阮潢は自由に自分の才能を実現し、新しい方向性を確立することに成功したといえる。それは受容と在地化であり、言い替えれば、経済、政治、文化の各方面において黎朝の儒教モデルからの離脱と東南アジア化とあってよい。自身の非凡な才能でもって、統治を始めて10年後には、順化の容貌が完全に刷新されたように記録されている。「烏州悪地は阮主が10年以上鎮守し、政は寛大で、軍令は厳粛で、人民は安居楽業し、市場の値段に嘘はなく、盗難もない。各国の商船が来港し、鎮は大きな都会となっている」¹⁾ 阮潢が1613年に世を去った後に、阮福源が先主の遺業を継ぎ、廣南阮氏一族としての事業を行う決心をした。彼は兵備を増強し、順廣地区の行政システムを東南アジア流に改め²⁾、1626年、北部との戦争の準備のため首府を Bồ 川岸の Phước Yên（福安）村に遷した。そして、北の黎朝並びに鄭氏政権との決別は1年後の南北間の大戦争により始まった。これにより中南部ベトナム（ダンチョン）が正式に出現したのである。首府福安は、わずか10年間（1626-1636年）存在したのみである。この短期間の首府は、廣南阮氏政権が都市としての首府造営を試みた時期と考えてよい³⁾。1635年より阮福源は、

1) 『大南寔録』: 引用は翻訳版、Quốc Sử Quán triều Nguyễn 2004, *Đại Nam Thực Lục, Tập I*, Bản dịch Viện Sử học, Nxb Giáo dục, Hà Nội, 31頁。

2) 父より、王位を継承してすぐの1614年より、阮福源は、統治システムを北部ベトナムとは異なる独自のものに改革する決定を下し、1744年（阮福闢の治世）まで、中央の政権は王を自称し、基本的権力システムを以下のように改めている。つまり、阮主は、自らを節制水歩諸營兼総内外平章軍國重事と称し、軍事、内政、外政の全てを掌り、その下に四柱大臣を置き、各方面の行政を管轄させた。そして、その下に三司を置き、舎差司、相臣吏司、令使司の役所を直属させ（首府には、さらに内令史司と令使徒家司を置いている）、都知、記録、該簿、衛尉などの役職を置いている。各地方は營、府の鎮管、縣、末端には社を置き、社には、独特な管理法でもって社長、相臣（該管社）、あるいは該屬、記屬（該管屬）などを置いた。阮主の政権機構は、北部の黎朝や鄭氏政権のものとはかなり異なっていたと言える。

3) 福安における踏査は、方角地割に沿った首府の本格的造営企画があったことを明らかにしている。首府は 中心に位

福安の役割は終わったと考え、天姥寺（Thiên Mụ）の丘の麓、金龍（Kim Long）に宮室の造営を始めた。

1636年、第3代の阮福瀾（1601-1648年）は、首府を金龍に遷し、都市フエとしての歴史が始まった⁴⁾。阮潢が天姥寺を建設してからの3代目の阮氏政権となっていたが、伝統的な風水観念により、都城の場所に関して、龍脈が強固で山と川の霊気が繁栄性に充ちている必要があった。従ってフエに新しい政治中心が生まれるのは必然であった。金龍は、中南部（ダンチョン）の首府として51年（1636-1687年）存続することとなった。この期間にフエは、金龍-清河-会安という独特の経済連結軸を備えた都市になったと考えられる。首都金龍の発展期間、特に阮福瀾（1648 - 1687年）の治世は、中南部（ダンチョン）が南へ拡大発展していく時機に重なっている⁵⁾。1687年、第五代阮福湊は首府を5里下流の富春の地に遷し、金龍は祖先祭祀の城府となった⁶⁾。Huong（香江）川とキムロン（金龍）川の2つの川の堆積が作り出した土地は王島と呼ばれ、フエの中心として風水観念上調和しているばかりでなく、都市規模拡大や経済発展に適していた。

この時期、富春は南北を軸とする農業経済と東西を軸とする商業経済において中南部（ダンチョン）の調整機能を果たす役を備えていった。それ故、首府が正式に博望（1712-1738）村に遷っても、富春の役割と地位というものはゆるがなかった。1738年、阮福闊は再び首府を富春に戻し、都市規模を拡大し、その後、ダンチョンの首府として“都城”⁷⁾という言葉が正式に利用した。この時期が19世紀以前のフエにおいて1つの頂点といえ、北部の昇龍（現ハノイ）と比べて、政治・経済・文化の中心として独特の性格をもっていた。この時期、ダンチョンの南部への領土、領海の拡大は現南部ベトナムの範囲に達し、南進は完了した⁸⁾。

置し、重要な建築群や道路がBồ川やその支流に向いている。参考：Phan Thanh Hải (2004), “Tìm hiểu nguồn gốc đô thị Huế từ việc khảo sát hệ thống thủ phủ thời các chúa Nguyễn”, *Nghiên cứu lịch sử*, số 9-10.

- 4) Tôn Nữ Quỳnh Trân は、都市学の基準に照らして、首府“金龍”が、前近代の都市に相当することを論証している。Tôn Nữ Quỳnh Trân (2006), “Bàn thêm về thời điểm ra đời của đô thị Huế”, *Kỷ yếu Hội thảo 700 năm Thuận Hóa-Phủ Xuân-Thừa Thiên Huế*, Hội KHLS Thừa Thiên Huế, Huế.
- 5) 『大南寔録』（翻訳版は、Nxb Giáo dục, 2004, tập 1 : 62, 72, 89, 91頁）は、南進の過程における変遷を以下のように明確に示している。1653年、阮福瀾は該機雄祿をもって、チャムの軍を退け、富安を領し、さらに Phan Rang 川の土地まで攻略し、泰康營を設置し、泰康府と延寧府を置いている。真臘に対しては、阮福瀾は1658年に辺營鎮副将、尊室燕に3000の兵を指揮させて、興福（Hung Phúc: 現在の Biên Hòa）で真臘軍を破り、真臘王の Nặc Ông Chân を捕虜にしている。そして、Nặc Ông Chân 王を解放した後、ベトナム人流民を南部に入植させ生計を立てやすくしている。1674年には、阮福瀾は統兵、阮陽林に兵を率いさせ、真臘に侵攻させ、サイゴンを攻略し、阮主の南部での影響力を確固たるものとしている。1679年には、さらに、楊彦迪と陳上川らが率いる3000人の明の遺民を東浦に入植させ、ピエンホアから美湫（Mỹ Tho）までの領土を確立した。
- 6) 黎貴惇『撫邊雜録』:引用は翻訳版 Lê Quý Đôn, *Phủ biên tạp lục, Lê Quý Đôn toàn tập-tập I*, Viện Sử học 翻訳, Nxb KHXH, Hà Nội, 63頁.
- 7) 『大南寔録』:引用は翻訳版, 前出, 148-151頁.
- 8) 首府が富春に遷ってから南進は続けられ、『大南寔録』にそれらの南進過程は記録されている。1698年に、阮福潤は、阮有鏡に真臘の地を経略させ、鎮辺營、藩鎮營、そして嘉定府を設立し、1000里の広さの土地と4万戸以上の人口を支配下に置いている（『大南寔録』:翻訳版, 前出, 111頁）。1708年には、莫玖（Mạc Cửu）に河遷の地に配

2. 首府はベトナムの伝統文化を継承発揮する中心の役割を果たしてきた。

廣南阮氏の遺物（文物）にみられる装飾の文様配置やそのテーマを美術的にみると、ベトナム美術研究院の研究者などは、北部ベトナムの芸術の雰囲気以外に、ちょっと奇異で見慣れない要素を文様やそのテーマに感じるようだ。

例えば「フェ美術」では“こうした文物を前に、北部ベトナムの伝統芸術に慣れ親しんでいるものは驚きを禁じ得ず、鄭氏と阮氏政権間の抗争による国土の分離は、民族とその伝統文化の分離には到らなかったのだと認識することになる”⁹⁾。この認識は客観的で、十分な理由があるとしてよい。14世紀の初頭、つまり、陳朝の玄珍公主とチャンパ国王制旻の結婚から現在に到るまで、南進したベトナム人は、その移住先にそれまでの彼らの文化伝統を持ち込み続けている。

鏡を持って境をこえる道のり

南の空はいつも昇龍（タンロン）の地を思い出させる。

（黄文芸）

ベトナム人の文化伝統は、彼らが新天地でも強固な精神的な主柱をもつように手助けしており、清の満族が中原に入った時の場合とは逆に、その土地の文化と同化することを防いだ。しかし、廣南阮氏が順化の地に入って以降、新しい精神文化的伝統、強力な方向性を持ってつくられていった。

また同時に城隍神祭祀は促進され、村のディン（亭）はあちこちで建設され、村社会の成員間の人間関係に密接に結びついた。廣南阮氏は、自らがよく知っている大乘仏教を保護し、発展に尽力し、国土への影響力を築いた。阮朝はベトナムの様々な伝統を消し去らなかった。特に大乘仏教を崇敬し、仏教は、権力者が精神意識上も必要とするような基礎とみなされ、ベトナム民族意識や阮氏の強固な合法姿勢のよりどころとなった¹⁰⁾。

福安がダンチョンの首府として機能して以降、阮氏は独自の王国を形成し、北部から離脱する意図を露わにし始める。王国のそれぞれの首府、都は北部平原部の大都市の大半のように、“二つの川の間の都市”という伝統モデルに従って建てられている。金龍から富春に至る廣南阮氏の朝廷は、懸命に儀式や儀仗の独自創出を試みたが、所詮北部の黎朝朝廷の模倣に過ぎなかった¹¹⁾。廣南阮氏自身、1744年つまり

し、河遷総兵鎮とし、南部の西南地域への領土拡張がなされた（『大南寔録』：翻訳版、前出、122頁）。1731年には、統帥張福永が軍を率いて、真臘に侵攻し、1732年には定遠州の地を分割させ、隆湖營（現在の Vinh Long）を設立させている（『大南寔録』：翻訳版、前出、142-143頁）。1757年には、阮福闢が、東口道（クメール語で Phsar Dek と呼ばれていた現 Sa Đéc [沙瀝] 地域）、新州道（現 Tiền Giang [旧名：前江]）、朱篤道（現 Hậu Giang [旧名：後江] 地域）、堅江道（現 Rạch Giá [旧名：瀝架] 地域）、龍川道（現 Cà Mau [旧安川、廣川] 地域）のへ領土を拡げた（『大南寔録』：翻訳版、前出、166-167頁）。

9) Nguyễn Tiến Cảnh 編1992年, *Mỹ Thuật Huế, Trung tâm Bảo tồn Di tích Cố đô Huế-Viên Mỹ thuật*, Huế, 50頁.

10) Li Tana 1999, *Xứ Đàng Trong, lịch sử Kinh tế-Xã hội Việt Nam thế kỷ 17 và 18*, Nguyễn Nghị 訳, Nxb Trẻ, Thành phố Hồ Chí Minh, 112頁.

11) 宣教師 A. de. Rhodes は、“(北部と中南部ベトナム) 両方は、同じ法で、ほぼ同じ風俗を持つ”と記している [A. D.

阮福闊が王号を称して独立国を打ち立てるまで、自身をベトナムの臣民とみなし、黎朝の年号を各種文書や書類に用いていた。宮廷の礼楽も、広南阮氏は氏族の儀礼と音楽の伝統に基づいていた。

福安に首府を置いた時代、阮福源は、北部出身だが歌伎の家出身であるが故に鄭氏に重用されなかった陶維慈に出会った。陶維慈は兵備の面のみならず、宮廷礼楽の整備においても広南阮氏を大いに助けた陶維慈が和声署を組織し、そこには宮廷雅楽隊、宮廷舞踊隊、宮廷歌劇隊（*hát tuồng bội*）などの歌舞隊が含まれており、歌劇の演者は歌工と呼ばれていた¹²⁾。しかし、雅楽や歌劇（*hát tuồng*）は北部ベトナムに起源をもつもので、陶氏が北から持ち込み正式に流布されたのである。金龍に首府が再び戻るまでの間の若干の歴史資料は、宮廷内で活動する歌女や舞女はみな北部ベトナムあるいは清化・芸安（現タインホア・ゲアン省）出身と伝えられている¹³⁾。従ってそれぞれの首府は、新天地にそれまでの伝統的民族文化を継承発展させたといえる。この継承は創造と躍動性を持ったものであり、それぞれのベトナム文化伝統は日を経るに従って、生命力と受容力を増していった。従ってダンジョン（中南部）の文化基盤は、広南阮氏が新しいモデルで意図的に作り上げようとしたが、常にその起源地（北）に顔を向け、近くに位置しようとしたものだったといえる。

そのため、200年間の南北別離の時間があつたが、南北統一が終ると南部と北部の文化は急速に融合統一されていった。

3. 地元と新来の文化要素との接触継承、そしてダンジョン文化としての特色形成における首府の役割

ベトナム文化を力づけた特性の1つは、文化の精華的部分を受容・抽出し、自分のものにしていく点である。順化の地に入って、次第にダンジョンの占領していく過程で、広南阮氏は、全く新しい社会背景に抵抗しなくてはならなかった。地元の文化基盤は、チャム人・クメール人や各少数民族のインド系文化や、その他の文化の特色に色濃く影響されており、儒教文化に大きく影響されたベトナム（京族）文化とは大きく異なっていた。当然、広南阮氏は自身の発展のために、自文化より優れているところや、自身に利益のあるところは、継承・摂取することを上手にやりとげた。

順化の地に入ってからすぐ阮潢は地元の神々を巧妙に承認・支持した。愛子（Ai Tu）では、阮潢は夢で川の神に、侵略の将、立暴¹⁴⁾を打ち負かす方法を教えてもらい、フエに入ると再び、自身を河溪の山に

Rhodes 1994, *Hành trình và truyền giáo*, bản dịch của Hồng Nhuệ, Tủ sách Đại Kết, Ủy ban Đoàn kết Công giáo Thành phố Hồ Chí Minh, Thành phố Hồ Chí Minh, 49頁].

12) 『驩州記』(翻訳版: Hoàng Châu Ký), “Tuồng cung đình ở cố đô Huế”, *Bảo tồn và phát huy giá trị Tuồng cung đình Huế*, Trung tâm Bảo tồn Di tích Cố đô Huế, 2001, Huế, 31頁.

13) 『大南寔録』(引用は翻訳版, 前出, 82頁)は、自身が墮落するのを恐れて阮福瀨が掌宮阮福喬を使わして、氏丞という父安出身の有名な歌女を殺させたことを言及している。

14) 阮潢は、愛子に軍を置いた時に、莫氏は将、立暴の指揮下、60艘以上の船を派して順化を攻めた。阮潢は夢に現れた川の女神のお告げに従い、美人を使った謀を計り、この侵攻を退けた。この川の女神を祀つるために阮潢が建てた愛子の川岸の廟は、1913年にL. Cadièreが踏査した時にまだ残っていた。

姿を現す仙婆“青裙赤服”のお告げに従うものだとみなし、天姥寺を起工し、阮氏の基業が長く続き、その土地が強盛であることを祈念するに到っている。ここで注意すべきは、阮潢はチャム族の偉大な土地神ポナガル神の姿をベトナム人が知っている道教の仙婆“天姥あるいは天母”を姿に同化させ、その土地の将来にとって重要な役割を果たすことを宣言していることである。これは在地化と呼べるもので、自身の事業を正当化することにもなり、政治的にも意義が大きかった。

天姥寺は落慶すると地元の神聖性を、また各宗教形態の融合性を象徴する場となり、また広南阮氏にとっても地元の神霊の加護をうける場ともなった。

文化面でダンジョンの人には、在地の人の居住、交通、生産、衣食、さらには精神生活形式にいたる様々な習慣を素早く摂取した。ダンジョンの人々の居住形式は東南アジア各民族のものに近く。17世紀前半、Cristophoro BoriとAlexandre de Rhodesがダンジョン、そしてフェにやってきた時、両者共に「全ての家々は地中に深く埋められた高い柱の上に乗っかっており、そして板を張り付けている。また、板を外して網代に代えたり、また家を空にして雨季の洪水時には船が入れるようにしたりしている」¹⁵⁾という記述を残している。Li Tanaはいくつかの歴史資料に基づいて、ダンジョンでの高床式住居居住は18世紀まで続いていたと考えている¹⁶⁾。

交通手段に関してはダンジョン人の各種の船、特に海に乗り出す船に関してはチャム人の船を借用した。ベトナム語のgheの発音とマレー語のgai(錨の網、帆柱の意味)の発音が類似しているという指摘や、マレー語のPrahu(小船という意味)が変化してベトナム語のghe bau(ジャンク船)になったという指摘がある¹⁷⁾。

生産工具において、ダンジョンのベトナム人は、チャム人の犁を借用(改造してより丈夫で角度を調整できるようにした。犁にはチャム語の部分名称が残っており、ベトナム語になっている部分もある。食事文化においては、ベトナム人は現在まで生魚料理、各種のナム(魚など各種発酵調味料)などのチャム人の食事文化を継承している。また服飾文化についても、フェのアオザイは有名だが、チャム人女性のアオザイを起源としており、北部の女性とは姿身が異なっている。また、墓の習俗に関してもダンジョン人はチャム人形式の墓を応用している¹⁸⁾。

在地の住民、特にチャム人のダンジョン人の生活様式への影響はこの他、色々な面に及んでいる。Li Tanaは、ベトナム人は外国人との交易に門戸を開き、推進するにあたって、チャム人を手本にしたと考えている。阮氏政権やダンジョン人の商売に対する態度は非常に熱心・開放的で、北部とは全く違うものであった。ダンジョン人はチャム人の鬪象や鬪虎の習慣(阮朝期フェの虎圈遺跡はその名残である)、奴隷売買(北部にはほとんどなし)や海賊の習慣なども受容していることに注目したい。

広南阮氏政権は一国家として、大乘仏教を新天地におけるベトナム人の伝統的思想意識の拠り所とす

15) Christophoro Borri 1998, *Xứ Đàng Trong năm 1621 (Cochinchina)*, Nguyễn Khắc Xuyên và Nguyễn Nghi 訳, Nxb Thành phố Hồ Chí Minh, Thành phố Hồ Chí Minh, 48頁.

16) Li Tana 2001, “Xứ Đàng Trong thế kỷ XVII và XVIII – Một mô hình khác của Việt Nam”, In trong tập *Những vấn đề lịch sử Việt Nam*, Tạp chí Xưa & Nay – Nxb Trẻ, Hà Nội, 191頁.

17) Li Tana 2001, 前出, 193頁.

18) Li Tana 2001, 前出, tr 192頁.

だけでなく、在地文化を含む新しい文化や思想も収納した。その際、各首府は新文化要素が出会い接触変化する中心地の役を担い、ダンジョン文化の特色を作り出していった。

Li Tana は、ダンジョンの17-18世紀歴史・経済・社会の研究において一章を割き、「ダンジョンの生活；入地と創造」として文化の分析を行っている。彼女は、以下のように考えている。ベトナム人は南進した際、それぞれの地方で色々な民族と出会ったが、その中で最も多かったのがチャム人である。ベトナム人移民は新天地の中でチャム文化と自由な雰囲気のある多くの文化様素に接し適応した。その中で、いくつかの新しい要素を採用し、いくつかの古いものを捨て去った。これにより、南の新天地の社会・文化・自然環境の中で根を下ろしたベトナム独特の意識というもの生まれるに到った¹⁹⁾。Li Tana がベトナム文化の特色と呼んだものは、ベトナム人の伝統文化と新しい文化のそれぞれの価値が統合され、新条件下に適応したものであった。移民の南進過程と共に行われた新文化の創出というものは、最初期において陳・胡・黎の各王朝の征服が試みたような“征服”や“純質化”を意識して行ったような性格は非常に色薄く、広南阮氏が南に入って北から離脱する意識が成熟して、ようやく上記の意識が強化されはじめた。

各首府の建設において、特に金龍と富春の建設時代は北部の鄭氏との抗争が激烈を極めた時代だが、広南阮氏は自身の基業を守るため、それぞれ独自の文化をもった国土建設のため腐心している。伝統文化の上に、広南阮氏は新文化受容を促進させている。キリスト教の布教は自由化されたし、オランダ人と不和になることはなかった。明郷人による種々の中国文化も、自由に持ち込み受容された²⁰⁾。チャム人の文化要素も、適するものである限り受け入れた。広南阮氏は日本人や中国人を自身の政権の中に取り込み、西洋人さえも利用した。もちろん、医者や教育者としての立場であったが。

こうしたことは以前の王朝ではなかった。華人移民は特に商人グループに対して、広南阮氏は、フエ、ホイアン（会安）、クイニョン（婦仁）、サイゴン、ハティエン（河遷）などの商港都市に定住を許した。広南阮氏は華人を商業活動や領土拡大に最大限利用したのみならず、彼らを通じて中国本土で威信のある大乘仏教の和尚たちを”弘陽正法”の地であるダンジョンへ招聘した。フエの天姥寺、報国寺、慈曇、国恩寺などの大きな寺院の開山はそうした和尚達によるものである²¹⁾。

ダンジョンに新しく持ち込まれた新しい文化要素と在地の文化要素の結合と発揮がなされる過程で、ベトナム文化ではあるが、新しく豊かで特色に満ちた文化の地が形成されていった。これは残されたダンジョンの物質・非物質文化において露わになっている。フエに残る広南阮氏時代の遺跡や遺物群がその代表である。それらは多くはないが貴重な文物であり、この時期の美的風格などに関する芸術的到達度をよく反映している。昭儀陵²²⁾、各王に仕えた大臣の墓や青銅の大鍋、大砲、鐘、碧、鏡、さらには石

19) Li Tana, 前出, 193頁.

20) 天后（媽祖）、財神、五王（五行神？）や三位王（三位壇娘？）信仰、閩聖信仰などがある（Trần Đại Vinh 1995, *Tín ngưỡng dân gian Huế*, Nxb Thuận Hóa, Huế, 53-112頁）

21) 天姥寺は阮潢が1601年建設し、1695年に釋大汕が弘陽正法に訪れた。しかし、現在でも寺で釋大汕は開山の祖として祀られている。この他、中国僧が開山の祖となっている代表的な寺として、報国寺（覺豊和尚）、慈曇寺（明弘紫容）、恩寺（謝源韶）などがある。

22) 阮福闊の妻、昭儀（Trần Thị Xà）の陵墓。

碑、レンガ、陶磁器などがそれに当たり、そのほとんどは金龍-富春時代のまさに都市フェが形成された時代に当たる。

広南阮氏の陵墓は、非常に独特のものだが、チャム人や明郷人の陵墓の影響を受けている²³⁾。広南阮氏の各文物は独特の風格をもつ。製作面においても特に青銅器は非常に高い技術レベルに到達している。各職人は北からの鑄造技術を持ち込み、ヨーロッパの先進鑄造技術と併せて大型品を製作した。変わった形をした何千kgもの大鍋（鼎）は東アジアの伝統的形式とはいえない。何百～何千kgの大砲は精緻に作られており、象嵌された優雅なもので、一つ17世紀末に釋大汕をして沈黙させ²⁴⁾、現在でも驚きを感じる人が多いものである。

金龍に首府が位置してから、フェの青銅鑄造業は独特の風格を備え発展した。美術の装飾文様は、ベトナムの伝統文様と在地のものや西洋のものを結合したもので躍動感に満ちている²⁵⁾。一般的に金龍-富春時代の各文物、大型の青銅製品に限らず、陶磁器なども美術的にレベルの高い絵などで装飾されている²⁶⁾。金龍-富春時代までに、ダンジョンではフェの特徴を備えた美術様式が成立していたとまで言い切ることはできないが、優雅で精細な装飾が存在し、広南阮氏はそれらを完全に受け継いでいったのである。

また、歌劇（トゥオン）や歌謡のようにいくつかの芸術は広南阮氏の時代に成立し、その時点で独自のものとなっていた。フェ宮廷の歌劇は、北部に起源をもつが、新しい環境で作られた”ダンジョンのトゥオン”としての特徴をもっている。また歌謡はTrần Văn Khêによればフェ地域の特色をもった貴族の音楽であり、楽しげで速い調子の“北息（北調）”と悲しげでゆるやかで抒情豊かなリズムを持った“南息（南調）”を持ち併せている。

4. 結論

広南阮氏の各首府は、政治・軍治・文化・経済の中心として国土の存続と発展のために重要な役割を果たしている。北部との抗争における司令部であった。また、これにより南進は始まり、国土の拡大はさらに続いたのである。そして、金龍-清河（タインハー）-会安（ホイアン）、あるいは富春-清河-

23) Li Tana は、Đỗ Văn Ninh の意見に基づいて、中部の陵や墓はチャム人の影響があるため、北部や南部のそれとは異なるとみなしている [Li Tana, 前出, 198頁]。しかし、我々は、阮主時代の陵や墓には中国・明からの影響があると考えている。[Phan Thanh Hải (2005), Di tích thời chúa Nguyễn trên đất Thừa Thiên Huế, *Huế Xưa & Nay*, số 5]。

24) 釋大汕『海外紀事』：引用は翻訳版 Thích Đại Sán (1963), *Hải ngoại ký sự*, Viện Đại học Huế - UB Phiên dịch sử liệu Việt Nam, Huế, 34頁。

25) Trần Lâm Biền は、17世紀に入ると、中部ベトナムでは西洋からの接触が多くなり。阮主はポルトガル商人に門戸を開き商売を行った。彼らは、阮主の経済を助ける一方、文化の領域にも参加した。新しく開拓した土地において、大鼎を鑄造する伝統や能力がない状況下、外国人の専門家の参加を求めるのは合理的であり、結果的に東西が融合した大鼎となった。この大鼎には、伝統分から見ると珍しい、多くのモチーフや装飾が施されている [Nguyễn Tiến Cảnh 編 (1992), *Mỹ Thuật Huế*, Trung tâm Bảo tồn Di tích Cố đô Huế-Viên Mỹ thuật, Huế, 50頁]。

26) フェで伝承されてきた17世紀の陶磁器のなかで、芸術的・史料的価値の高いものとして、天姥寺の光景、思賢（海口）の海、海雲峠などがある。

会安というモデルが、首府と交易開放政策により形成され、ダンジョンでの商業経済発展を促進し、その繁栄につながった。また各首府は在地や外来の文化要素を摂取して民族の伝統文化の継承や価値発揮に大きく貢献し、ダンジョンの特色ある文化が形成された。

17世紀以降、紅河平野とは別に、富春（フエ）という新しい文明の中心が出現し、タンロン（現ハノイ）に挑むこととなり、順廣地区（*Thuận Quảng*：訳者注現トゥアティエンフエ省からクアンナム省まで）という重要な第2の社会経済地域が形成された²⁷⁾。

金龍－富春というそれぞれの首府は、フエにとってフオン河に沿って位置する最初の都市であり、この時期（1636-1775年）に、都市の性格のみならず、各文化面においてフエ的ともいえるものが形成された。

27) Li Tana, 前出, 186頁.

